

私の園の研究

後藤 静子

仕事の動機

私達の仕事は今迄の失敗や、行詰りや、果してこれでよいのかという不安などから始まったと言える。と言うのは昭和二十五年にそれ迄の経験と文献を頼りに、只無我無中でカリキュラムを作った。そして目標も内容も評価も立派な事を謳って、これで幼児教育に要求されている項目は大体組入れたと思つて安心した。又色々調査をしてこれで幼児の実態は一応掴めたと思つた。そのカリキュラムをとにかく一年間実行に一つ一つ実行してみたのである。その結果不備な所だらけだったので、それを改

めてきたのだが、同じような方法で年々カリキュラムを単に改訂していくという事には意欲を失つてきた。例えばカリキュラムの中の目標にしても私達がこういう人間を育成していく為にはこういう事を幼児に望みたいと切に願つて掲げたものであれば、毎日の保育活動に力強く生きて働き幼児のものになつていくのだが私達のやり方はそうではなかった。だから少し位字句を改正してみても大して意味がない。又、切実な問題を解明する為の調査であればよいのだがそうでないので、幼児の身体的・知的・社会的・情緒的発達を一通り調査して結果を纏めてみても、その数字が唯単に数字として挙げられただけで毎日の保育に生かされず遊離してしまいがちだった。それで機械的に半ば習慣のように調査を繰返す事に意欲を失ひ、幼児と共に歩んだ実際の足跡を辿つてみることに即ち幼児と教師とで日々創り出していくカリキュラムを記録していく

仕事に興味を持ちだした。これは現場にいる私達でなければできない仕事であり、その仕事を通して生きた幼児の実態が掴め、

少しずつ幼児教育のあり方が分つてくるよ
うな気がした。こういう動機から私達は、
「こどもの動きの中から」という仕事を始
めたのである。

—仕事のすすめ方— 教師が三人いるので
(一)こどもは集団生活の中でどのように変つ
ていくか。

(二)こどもはどのように遊んでいるか。

(三)こどもは創り出す力をもっている。

の三つに分担を決めて幼児の動きを捉えていく事にした。二度とやり直しを許されない大切な保育をしながら記録をとるのであるから、決して科学的なものではなく研究などと言えるものではない、かも知れない。しかし私達には何かそこには血が通つているという感じがする。都市の計画を勝手に押つける保育と違って、こうして幼児の動きをよく捉えようとしていると、ではその動きを一体どういう方向へ導いていったらいいだろうと今までもよりも切実に考えるようになった。単にカリキュラムに書いておく目標ではなくて実感としてもっている目標が必要になつてきた。暗記して覚え

ている目標とは別に、意識していないにしても私達は私達の目標をもっている筈である。一体私達は現在どういう方向へ幼児を導こうとしているのだろうか。それも、幼児達をみつめればそこに反映されているに違いない。私達の幼稚園の幼児の特徴は一体何だろう。どういう雰囲気幼稚園だろうと反省してみた。しかしこれは容易に言える事ではない。今仮りに極く簡便に私達の主観と第三者の感想を参考までに拾い出してみると、

(一) 乱暴でお行儀が悪いが、明るく伸び伸びしている。(二) 不平を言ったり騒いだりするが、自分で考え自分でやろうとしている。

などと言う事が言えるらしい。幼児は天真爛漫で裏表がないというが、幼稚園では余儀なく大人しくしているが帰途や家庭ではいたずらだという事はないだろうか。私達はどこにかく一日も早く皆が殻を脱いで裸の自分をありの儘に出してくれる事を願っている。そうなつてはじめて教育が始められると思つている。だから明るく伸び伸びし

ているという事は私達のこの希いが少しづつ現われてきたのではないかと自己満足しているのである。しかし明るく伸び伸びした幼児が社会へ出てもなお明朗でおおらかなしかも自己に忠実に堂々と生きていける人間になるとは限らない。果して社会に出てうまく適応^{てきよう}していけるかどうかは分らない。それはまだまだこれからの研究問題である。又今迄は保育を円滑に進めていく事に囚われていたので、卒直に幼児の人格を認め自分で考え自分でやるといふ教育の必要を理解していても実際には中々できなかった。幼児の動きを捉えようとする保育は幼児が予想以上に自分で考え自分でやれるものだと私達に教えてくれた。私達はしっかりと自分の考えで判断しお互いの意見を充分尊重しながら建設的に所信を貫いていく人間につながる毎日の保育でありたいと願つている。もう一つ現在はまだよくできていないが何よりも皆と仲よく遊べる幼児にしたいと思つている。教師とも友達とも仲良く助けあい和やかな楽しい幼稚園生活を經驗させる事により、お互いに信じあい

助けあつていく温かい包容力のある人間に育てていきたい。私達はこういう希いから現在三つの目標

(一) 明るく伸び伸びしたことも

(二) 自分で考え自分でやろうとすることも

(三) みんなと仲よくしていくことも

をえがいている。果してこれでよいかどうか又どうしたらこれに到達できるかという事はこれから仕事を進めていく間に段々はつきり分つてくるだろうと思う。仕事の見透しとしては先ず幼児の動きを色々な角度から深くみつめていく事から始めて、次には幼児の動きと私達の目標とを、言換えれば幼児達のやりたいと私達のこうありたいというこの二つのをどう結びつけ伸ばしていったらよいかという方向へ進めていく予定である。

仕事の計画

こどもの動きをみつめるのに三つの観点を設けたのだがその意図と今後の計画の概略を述べると、

(一) こどもは集団生活の中でどのように変つ

ていくか　の所では従来ただ四月にはこう
いう躰け五月にはこれとこれというように
計画を立てて来たが、それよりも先きに幼
児にとって始めての集団生活をどう受け入
れどう展開していくかを捉えてみたいと思
ったのである。

○こどもはどのようにして集団生活に入っ
てくるか―安定して自我を出す迄の色々
な過程、

○どのように集団生活を経験していくか―
集団行動に慣れグループ活動を始める過
程、

○どのようにしてきまりができるか―きま
りの理解と習慣すけ、約束を自分達で決
める過程、

○集団生活による成長の記録―各幼児に就
いて、

○年少組と年長組の交流はどの様に行われ
るか、

○幼稚園と小学校という二つの集団生活の
関係はどうなっているか等である。

○こどもはどのように遊んでいるか、とい
うのは幼児の生活は遊びであると言いな

ら、一日の幼稚園の生活の中で幼児が生き
生きと遊んでいるのは一体どの位あるだろ
う、ピアノに合わせて無感動に手足を動か
している等という時間が案外多いのではな
いか、もつと幼児の生き生きした遊びをみ
つめたいと思つた。

○どうした場合に充実して遊ぶのだろう―
喧嘩の起りや推移、友達との関係や交渉
の深まり、

○どのような形で遊ぶのがよいのだろう―
自由遊びとお集まりの関係、一日の計画
のあり方、

○どのように遊んでいるのだろう―遊びの
内容や年令、環境、経験と遊び方の関係
○どのような指導によつて遊びが充実して
くるのだろう―小学校との関連もふくめ
て考えていきたいと思つた。

○こどもは創り出す力をもっている。数年
前は幼児が自分で好きな材料を選んで独り
で創り出すとか、幼児の動作に教師が即興
作曲して創作表現をする等という事は夢に
過ぎなかつた。しかし確かに幼児は台詞を
教えずに自分達で衣裳まで考へて劇を

して遊べる。

○幼児の創作的表現とは一体何だろう―表
現活動の芽生えのいろいろ、

○表現活動はどんな場合に生き生きと活潑
になるのだろう。―環境や経験との関係
はどうか。

○創作活動はなぜ必要なのだろう―幼児の
事例、

○創作活動を望ましい方向へ導くにはどう
したらよいか等を求めていきたい。

こうして日常私達が話合っている事を文
章にしてみるといかにも身に余る大問題に
取組んでいるような気がしてしまつた。し
かし始めに言つたようにこれはもつと確信
をもつて保育しなければという必要に迫ら
れて始めた仕事である。発表するのはどう
かと思つたがこの機会に色々お教え願ればと
思ひ、これから折をみて具体的な報告をし
て御指導頂きたいと思つている。

(静岡大学教育学部附属幼稚園)

× × ×